

第百七十話 生等もとより生還を帰せず！

（「第八十五話 国家存亡の危機時の非常措置：学徒出陣」関連）

第八十五話で説明した第一回出陣学徒壮行会は、1943(S18)年10月21日に明治神宮外苑競技場で行われた。学徒壮行会は、冷たい秋雨が降りしきる中、首都圏の77校が参加して行われた。東京帝国大学文学部学生の江橋慎四郎による答辞を紹介する。

1 答辞全文

『明治神宮外苑は学徒が多年武を練り、技を競ひ、皇国学徒の志気を発揚し来れる聖域なり。本日、この思ひ出多き地に於て、近く入隊の榮を担ひ、戦線に赴くべき生等の為、斯くも厳肅盛大なる壮行会を開催せられ、内閣総理大臣閣下、文部大臣閣下よりは、懇切なる御訓示を忝くし、在学学徒代表より熱誠溢るる壮行の辞を恵与せられたるは、誠に無上の光榮にして、生等の面目、これに過ぐる事なく、衷心感激措く能はざるところなり。



惟（おも）ふに大東亜戦争宣せられてより、是に二星霜、大御稜威の下、皇軍将士の善謀勇戦は、よく宿敵米英の勢力を東亜の大地より撃壊払拭し、その東亜侵略の拠点は悉く、我が手中に帰し、大東亜共栄圏の建設はこの確乎として磐石の如き基礎の上に着々として進捗せり。

然れども、暴虐飽くなき敵米英は今やその龐大なる物資と生産力とを擁し、あらゆる科学力を動員し、我に対して必死の反抗を試み、決戦相次ぐ戦局の様相は、日を追って熾烈の度を加へ、事態益々重大なるものあり。

時なる哉、学徒出陣の勅令公布せらる。

予ねて愛国の衷情を僅かに学国の内外にのみ迸しめ得たりし生等は、是に優渥（ゆうあく）なる聖旨を奉体して、勇躍軍務に従ふを得るに至れるなり。

豈に感奮興起せざらんや。

生等今や、見敵必殺の銃剣をひっ提げ、積年忍苦の精進研鑽を挙げて、悉くこの光榮ある重任に獻げ、挺身以て頑敵を撃滅せん。

生等もとより生還を帰せず。

在学学徒諸兄、また遠からずして生等に続き出陣の上は、屍を乗り越え乗り越え、邁往敢闘、以て大東亜戦争を完遂し、上宸襟（しんきん）を安んじ奉り、皇国を富岳の寿きに置かざるべからず。

斯くの如きは皇国学徒の本願とするところ、生等の断じて行する信条なり。

生等謹んで宣戦の大詔を奉戴（ほうたい）し、益々必勝の信念に透徹し、愈々不撓不屈の闘魂を磨礪（まれい）し、強靱なる体軀を堅持して、決戦場裡に挺身し、誓って皇恩の万一に報い奉り、必ず各位の御期待に背かざらんとす。

決意の一端を開陳し、以て答辞となす。

昭和十八年十月二十一日

2 その節の「生等、もとより生還を期せず」は有名な言葉である。答辞は教授の添削を受けたが、「生還を期せず」は自ら考えたものだった。

3 江橋慎四郎氏略歴

1920(T9)年6月、鎌倉市生まれ 東大在学中に学徒出陣、戦後、文部省体育局勤務などを経て、東京大学教授。その後鹿児島大学教授や中京大学教授を歴任した。さらに、日本初の国立体育系単科大学である鹿屋体育大学の創立に尽力し初代学長となる。定年後は東京大学名誉教授となる。2018年4月8日、心不全のため死去。97歳没。

* 答辞については、長らく黙して語らなかつたという。“生還を期せず”と明言せるにも関わらず生き残ったことに忸怩たる想いがあつた？

（第百七十話 了）